

危機の時代の博物館と研究者

— 身を削ること、人と仲良くすること —

かつてソ連邦崩壊後のロシアでは経済危機に直面し、博物館や美術館が窮地に追いやられた。それほどではなくとも、今、日本の博物館も廃館などの危機に晒されて久しい。生き残るには、贅肉を削り、核となる部分を発展へとつなげていく必要があるのではないか。社会のための活動の中身を世の中へ伝えることが重要だろう。

森田 利仁 (もりた りひと)
千葉県立中央博物館教育普及課

ロシアの博物館の危機

一九九三年の秋と冬、当時モスクワ大学で働いていた妻をたずね、ソ連邦崩壊直後のモスクワを訪れたことがある。このときすでに千葉県の博物館に勤めていたので、ロシアの博物館事情に少なからず興味があったが、実際に目にしてみると悲惨そのものであった。モスクワ市内

あつたらう。古生物博物館の標本が、西側の標本業者によって売りに出されるといふ事件も起きていた。真の危機に遭遇したとき、人間は素に戻ってしまう。

さて今日、日本の博物館、とくに公立博物館は、その経営の岐路に立たされているといえる。どこその博物館は廃館されそうであるとか、指定管理者となるとか、耳にタコができるほど、次々と新しい動き、それもあまり明るいとは思えない動きが起きてきている。しかしそれでも、当時のモスクワで見た危機的状况に比べれば、まだ素の人間に戻るほどの危機ではない。博物館に勤める人間は、その職業倫理観を麻痺させてはいけなしいし、博物館本来のあるべき姿を忘れるほど浮き足立つのは早い。あるべき姿とは、資料を守ること、それに基づく研究活動を継続することである。そのことを忘れなければ、現在の危機はかならず乗り越えることができるし、社会が博物館の重要性を真に理解してくれるときがまたくると確信している。

ロシアにおいても一九九五年以降、まだまだ人びとの暮らしが困窮していたにもかかわらず、博物館や美術館が再建され、リニューアルオープンされ始めたのである。けつして外国人向け観光産業を活性化させるためでないことは、生物の奇形や変種を多数展示している「ダーウィン博物館」を訪問して理解できた。こもリリニューアルオープンしたばかりであったが、奇をてらうことなく、きわめてオーソドックスな標本展示に終

モスクワ大学博物館 (1993年)



ダーウィン博物館 (1997年)



ダーウィン博物館内の展示 (1997年)



モスクワ大学前地下鉄駅の露店商 (本文中の「妻の友人」とは関係ありません)

のおもな博物館で、まともに開館しているものはほとんどなかったし、大学博物館や図書館は閑散としていた。また科学アカデミーやモスクワ大学では給料が満足に支払われていなかったため、スタッフも学生もアルバイトで必死に生活費を稼いでいた。妻の友人の一人などは、露天商で食べ物売っていた。大学では、コピーの紙が不足していたため、友人のノートを筆写している学生がいたのも印象的であった。

この状況下では、博物館キョレーターや研究者の倫理観が崩壊するのも当然である。危機の諸相には、物理的で客観的なものだけでなく、心理的な相もある。博物館のような文化施設は、社会にゆとりがあつて初めて受け入れられるものである。明日の生活に不安を覚え浮き足立つってしまった心理状態では、文化を冷静に語ることはできない。現在の地方行政は、まさに浮き足立つてしまった感がある。医療はどうするか、学校はどうするか、という切実な問題について一種のバニックに陥つてしまふ、博物館ごとき問題を真剣に考えぬゆとりをもっていないとはとても思えない。だから、博物館は無駄である、非効率的であるという批判に対して正面きつて反論すると、逆切れするほど熱くなりすぎていくのが、現在の地方行政ではないだろうか。

贅肉を削り、核を残す

ではどうすれば博物館は守れるのだろうか。どこすれば博物館の基礎である資

コンゴ東部の伝達用太鼓

太鼓(標本番号H151403、高さ/66.4cm 幅/103.4cm 奥行/37.1cm)

梶 茂樹 (かじ しげき)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

林原自然史博物館にはミュージアム・エデュケーターというスタッフがいて、研究者とともに、あるいは研究者の長所を引き出しながら展示やイベントを企画しているらしい。林原の研究者は、使われることで苦しいことや、プライドが傷つけられることがあるかもしれない。しかし、自らの研究者としての個性を一般市民にわかりやすく伝えてくれる専属の宣伝マンもついていると考えれば、むしろエデュケーターに感謝しなければならぬだろう。同様に、近年さかんに名前を聞くようになった、インターナショナル・サイエンス・コミュニケーターも、研

アフリカのコンゴ(旧ザイール)でわたしが見、そして叩いたことのある伝達用太鼓は二種類である。ひとつは、国の北西部森林地帯に住むモンゴ族のもので、一本の木を一メートル弱に切り、中をくりぬいたものである。もうひとつは、東部の森林地帯に住むレガ族のもので、これも一本の木をくりぬいたものであるが、形状は、寸胴型をしたモンゴ族のものとは大きく異なり、女性のハンドバッグを大きくしたような形をしている。いずれも、動物の皮は張らず、パチを用いて叩く。

写真にあるものは、この後者のものであるが、同じタイプのもをコンゴ東部のいくつかの民族が用いており、これがレガ族のものか、あるいはソングラ族のものか、はたまた近隣のものは正確にはわからない。



い。しかし原理はまったく同じである。伝達の原理というのは、その言語の子音と母音を省略して、音の高さのみをこれ

なぞるのである。これは日本語にたとえてみると、たとえば標準語で三音節からなる「アタマ(頭)」という語は、アクセントパターンが低高高であるから、これを伝達する際には、低高高と叩くのである。
叩く際は、上部のスリットが自分と直角の位置になるように構え、片手にもったパチでハンドバッグの横腹の部分を押す。パチの先にはゴムの付いている、そのゴムの部分が太鼓に当たる。上の方を押すと板が薄いので高い音が出るし、下の方を押すと板が厚いので低い音が出るようになっていく。
レガ族の村で、「お客がきたから皆集まれ」という文を習い、何回も練習で叩いていたら、五、六キロメートル先からオジさんたちが集まってきた。「いや、練習なんです」と言ったら、「用もないのに叩くな」と叱られた。

良き理解者とともに

納税者である市民からの支持がなければ、博物館の存立も発展もありえない。しかし、博物館のなかでおこなわれている資料や研究に関する業務を、市民に理解してもらおうのは簡単なことではない。もちろん、一般的な意味において、

資料や研究活動を守るのだからか。ひとつの賢明な方法は、かわいらしく一巨縮小してみせることであると考え、博物館もその運営上、削れるものは削つてみせることである。このことにより、博物館も社会の一員として危機意識を共有している姿を示すことができる。ただし縮むといつても、博物館の核の部分は残さなければならぬ。贅肉を削り、核は残す。そしてその核を、次の時代に大きく発展させる基盤とするのである。

しかしながら、予算ひとつとつても、どの項目の予算を削るのか、どれを残すのか、博物館組織内で合意をえるのは容易ではない。いざとなると、研究者同士、あるいは研究分野間で内紛が起きてしまう。結局、研究者は大所高所から見る力に乏しく、内部で足の引つ張り合いをしてしまつて、生来そのような人種なのかもしれない。しかし、博物館を取り巻く社会が常軌を逸するほどに熱くなつていくとき、博物館内部で内紛を起していたら、それは潰される格好の理由を与えてしまつことになる。今こそ、資料や研究を大切に博物館を未来の子孫に残すため、研究者としては、学問と文化に責任を負う博物館人としての良心に問うべきであらう。



千葉県立中央博物館の展示解説員が企画した行事で活躍する研究員

究者と市民とのあいだに立つてくれる力強い味方かもしれない。いずれにしても、これら社会教育の最前線にたつスタッフと、うまくつきあうことができなければ、博物館研究者の未来はないと考える。わが千葉県立中央博物館にもそのようなスタッフが存在する。展示解説員という嘱託職員である。現在彼女たちの手になるニュースレターにより、博物館研究員の素顔が面白おかしく来館者に紹介されているし、彼女たちが企画するイベントに研究員は動員され、いつの間にか小学生向きにわかりやすく語の訓練を受けている。いずれも研究員自身が企画す

博物館事業の土台に資料収集や整理保存、それに関する調査研究があることは、理解されていると思うし、博物館に資料も研究者もいないと叫ぶ人は、現在の日本ではむしろ少数派であると思う。しかしながら、今必要な支持は、そのように一般的なものではない。資料や研究にどれだけのコストがかかり、どれだけの人員が必要であるのか、そのような具体的な数字に対する支持である。
研究は大変な仕事である。このことは多くの研究者が実感している。しかしそれを市民に理解してもらおうのは、困難である。ひとつの方法は、学界の権威を使って強引に理解させてしまふ、あるいは理解した気に見えること、国際的にも評価されていることを、ことあることに見せびらかせば、少なくとも周りの人たちは、何らかの反応を示してくれるだろう。しかしそれが、博物館研究者への信頼と尊敬に結びつくのか、ということになると大いに疑問である。博物館という社会教育施設においては、学界内での評価とともに、社会にとだけ還元したのが問われるのである。その評価が高くなければ、博物館で研究させてもらつことと言いつても立たない。
だから地域博物館の研究者は、必死になつて展示会や教育普及活動をおこなつている。純粋な教育意識とともに、自らの研究者としての活動も理解してもらいたいからである。しかしそれらにはときに自己宣伝臭が強くなりすぎるきらいがある。自らが自らを誉めるといふのは、やはり難しい。他人の口から宣伝してもらつのが、より効果的である。